

〔編集後記〕

◇ 発刊がかなり遅れたことを、まずおわび申し上げます。3号に予定していた特集号の編集が意外と長びき、このままで行くと、いつかのようにずると遅刊になって、とり返すのに大へんな苦勞の要ることを体験していますので、なんとかせねばと思いましたが、幸い4号に予定していたものの大部分が整いましたので、これをもって3号にかえさせていただき、並行して編集している旧3号分を4号としてひきつづき発行したいと思います。次号予告が従って2号とほぼ同様となりましたことをご了承下さい。

◇ さてこの号の総説は本学の助教授から和歌山県立医大へ移られた奥田稔教授にお願いしました。これは昨年暮の公募の際に会員からのご推せんがあったもので、鼻アレルギーを中心としたアレルギーにおける好酸球増多について review していただいたものです。アレルギーと好酸球の出現および意義についての諸説のまとめから、これがアトピー性アレルギーに特長的であること、その局所の検査が血中におけるものの検査よりも、アレルギー有無の診断に役立つことなどが要領よく述べられてあります。

◇ 田波先生の展望は、昨年12月で退官された先生が、最終講義にかえて、その在職中最も力を傾けられた無菌生物学について、本学におけるそのはじまり、経過、意義などについて今日の問題にまでふれられたもので、要するに人間の健康とは何か？という衛生学の命題を追求するひとつの有力な手段の活用について展望されたものです。

永瀬薬剤部長には附属病院の地階で、文字通り縁の下の力持ちとなって診療に貢献されている薬局の方々を代表して、ドラッグインフォメーションのあり方を教えていただきました。これも公募の際の会員のご推せんによるもので、今後もこのような異なった“目”による講座をお願いしたいものと思っています。今年もまた暮から来年の正月にかけて、総説・講座・展望などの公募ないしは推せんをお願いすることになる予定です。その折

には会員の方々から多数のご応募またはご推せんをお願いします。

◇ 原著は6篇ですが、まとめてみると生体内の神経機構に関連したものに小川氏の頸動脈小体の化学受容性神経発射についての研究、山岸氏の卵巣の神経支配についての研究があり、腫瘍をとり上げたものに大槻氏の子宮腫瘍の組織化学、相田氏の肉腫の血行性転移についての病理、狩谷氏の大腸のX線学的診断などがあり、また組織病理学的研究として天野氏の糸球体腎炎に関する研究があるなど、バラエティに富んでいます。なお山岸氏の論文は特別掲載です。

◇ 村越先生の診療余話は神経内科学的研究を続けてこられた先生が昨秋のパーキンソン症候群に対するL-dopa療法のシンポジウムに出られた折のBarbeau教授の講演を中心として最近の治療法のエッセンスを述べられているもので、とくに引用された図や表は大へん参考になると思います。

診療のための検査は、その9で血液培養です。これは救命的という意味で最も重要な検査のひとつといわれますが、検査の適応、時期、方法、判定法までが述べられています。さらには稲垣義明氏にお願いしました。

◇ 大学院公開セミナーは主として基礎の院生が自主的に行なったセミナーを、分担してまとめたもので、るのはな奨学会のご好意により、抄録集として掲載することができたものです。まず“要旨作成にあたって”をお読みになってから次へおすすみ下さい。

◇ 巻末には千葉医学会のメインイベントのひとつである学術集会の抄録集をのせました。毎年本学会と、千葉県医師会学術大会と、日医医学講座の連合大会として行なっているものですが、事前にプログラムだけではなく抄録をお届けするべきであると考え、集会委員長桑田教授におねがいで、かなり早目に原稿をとりそろえていただきましたが、編集・印刷の都合で今日に至りました。予定通り事前にお読みいただける時間があれば良いがと思っています。(萩原弥四郎)